

不登校児童生徒をサポートする 新しい学校の在り方についての視察と聞き取り

鈴木 治弥（学校経営コース令和5年度入学）

1 はじめに

筆者は教職大学院における課題研究を通して、不登校・学校不適應に対する支援の在り方について追究している。その主なテーマは、校内の直接支援者の負担および負担感の軽減に向けた、効果的で持続的な支援につながる対策である。このテーマに関連し、増加する不登校児童生徒に対応するための各種取組について、学校への視察訪問や関係機関への聞き取り調査等を行うことができたので、以下に報告する。

2 調査の概要

今回の視察と調査に協力いただいた先は、「学校」「フリースクール等」「教育委員会等」に大別される。これらに加え、「教育フォーラム等」にも参加した。「不登校・学校不適應児童生徒の対応に直接関わる取組（主に表1の●）」と「子どもを中心においた学びや学校づくりのシステム（主に表1の○）」の2点についての情報や発想が得られると考え、協力先を選んだ。増加し続ける不登校児童生徒をサポートするためには、学校の在り方も変わる必要があり、この2点がそのための重要なポイントになると期待されたためである。具体的な調査対象については、表1の通りである。当初の調査目的に応じて●と○で区別して示したが、実際の調査を通して、これら2つは非常に関連が強いものであり、明確には分けられないことも明らかとなった。

表1 協力いただいた学校や教育機関等
【訪問の機会をいただいた学校や機関等】

- 「新潟市立五十嵐小学校」の総合研修会に参加
- 「軽井沢風越学園」の視察研修に参加
- 「伊那市立伊那小学校」の公開学習指

導研究会に参加

- 「白石市立白石南小学校・白石南中学校」へ訪問調査

- 「教育相談研究会」に参加（新潟市教育相談センター）

- 「不登校担当者研修会」に参加（西蒲区教育相談室）

【聞き取り調査に協力いただいた団体や機関等】

- 「居場所合同相談会（新潟市）」におけるフリースクール10団体への聞き取り調査

- 「校内教育支援センター」についての聞き取り調査（新潟市教育委員会、広島県教育委員会）

【教育フォーラム等への参加】

- 「新潟県教育の日のイベント（新潟市）」に参加

- 「探究・情報教育体験研修会（富山市）」に参加

- 「深い学び教育フォーラム（新潟市）」に参加

など

3 調査の実際

（1）不登校・学校不適應児童生徒に直接関わる取組（●）について

増加傾向にある不登校児童生徒に対しては様々な取組がなされている一方で、成果を確認できずにいる学校も少なくない。不登校対応に特化した取組や先進的な取組を行っている学校や自治体、フリースクール等で展開されている対応は、一般の学校でそのまま取り入れられることばかりではない。しかし、ヒントとなることも多く得られた。ここでは、これらの調査から得られた「不登校児童生徒をサポートする新しい学校の在り方」に関わるポイントを示す。

表2 新しい学校における不登校児童生徒をサポートするためのポイント

①理念の共有

- ・教職員の日常的なコミュニケーション
- ・目的と方法に対する共通理解
- ・具体的な実践や仕組みへの落とし込み
- ・取組をリードする人材の配置（体制づくりを含む）

②児童生徒に関する情報収集と共有

- ・全教職員で全児童生徒を支援するという共通理解
- ・情報の一元化（新規情報の随時追加を含む）、ニーズの把握
- ・見取りや見立てについての協議
- ・時間や場の確保、無理なく継続できる方法の設定

③個に応じた支援

- ・見立てをもとに決定した支援策の実施と記録
- ・それぞれのペースや内容、方法（学習支援においても）の重視
- ・組織的な対応（目的連携、役割分担、校外機関等との連携を含む）
- ・支援策の評価と見直し、調整（仮説検証的な進め方）
- ・関係性（多様な人間関係）を構築するための機会確保、教育相談の充実
- ・居場所（物理的、心理的）の確保（SSR等の設置を含む）

④自己実現支援

- ・自己理解と自己決定の重視
- ・丁寧な目標設定面談の実施
- ・細やかなフィードバックの実施
- ・支援者の働き掛け（待つことを含む）に対する共通理解

⑤体験活動・探究活動の充実

- ・ひとりひとりの「やりたい」を尊重
- ・伴走者としての教職員の役割の明確化
- ・コミュニケーションの場の設定

⑥相互支援関係の構築

- ・相互理解を深める機会の設定
- ・協働経験による子ども同士の相互支援関係の構築
- ・教職員（SC等を含む）の協働体制および相互支援体制の構築
- ・保護者との協働関係の構築

いずれの訪問調査および聞き取り調査からも、大きな学びが得られた。以下に「学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）」である白石市立白石南小学校・白石南中学校（通称「白石きぼう学園」）について、そ

の特徴的な取組を3つ紹介する。

1つ目は、「教職員の情報共有の機会設定」についてである。教職員の勤務開始時間と児童生徒の登校時間との間に約1時間の差を設け、その時間帯に丁寧な職員打ち合わせを行っている。生徒の詳細な情報等については、記録文書等による共有を行っているが、直近の変化に対する見立てや当日の支援については、その場で協議・決定をしている。朝の時間帯に、連絡・報告に留まらず、協議・決定までをする機会を設けている点は、機能的であると感じた。

2つ目は、「学習保障」についてである。個々の「学び残し」や「つまづき」について、重点的に支援を行う時間を設定している。「どこまでが分かっている、どこでつまづいており、分からないところはどこなのか」ということを、児童生徒とのやりとりを通して教職員が把握し、それをもとに支援が行われる。子どもが「できない、わからない」を率直に表現したり、「分かった、できた」を教職員とともに喜んだりしている姿があり、この取組の効果を実感した。

3つ目は、「児童生徒の『やりたい』を尊重する取組」についてである。年度はじめの段階では、予め設定された行事等は一切なく、教職員と子どもたちが「何をしたいか」「何ができるか」「それを行うことにどんなよさがあるか」を相談しながら、取組を決めていく。「しなければならない」をできるだけ設けず、自分たちで考えながら、自分たちの学校をつくっていくという取組は、特徴的であると感じた。

この視察を通して、不登校支援に特化した「新しい学校の在り方」を学ぶことができたと考える。一方で、このような学校においても、一般の学校と同様に、教職員が試行錯誤を繰り返しながら実践をつくり上げているということも分かった。

（2）子どもを中心においた学びや学校づくりのシステム（〇）について

教職大学院における学びを通して、これまでの学校教育における「矛盾点」のようなものに意識が向くようになった。そのひとつが、「目指したいこと（目指すべきとされていること）」と「それを実現するための仕組み」の不整合である。例えば、「多様性の尊重」を掲げながら、「同一性の高い集団」をベースとした運営をしていたり、「個に応じた指導・支援」の重要性を謳いながら、「共通の枠組み」を軸とする教育活動を行っていたり、「主体性」を重視しながら、「教師が与えること」を当然のこととしていたり…。学校現場には、このような矛盾や不整合が多々ある。これは、児童生徒への効果的な教育の実現、教職員の働き方改革等の観点から、課題であると捉えられる。また、この課題の解決は、不登校対策においても重要と考える。そこで、学校教育の矛盾や不整合の改善を、「子どもを中心においた学びや学校づくり」という視点で行っている実践に着目し、各学校や各取組についての調査を実施した。ここでは、これらの調査から得られた「不登校児童生徒をサポートする新しい学校の在り方」に関わるポイントを示す。

表3 不登校児童生徒をサポートする新しい学校の在り方のポイント

【「学校づくり」に関わって】

①学校づくりにおける当事者化

- ・ゼロベースでの話し合いの実施
- ・ビジョンの共有、目的と方法の明確化
- ・「できるところから始める」という発想の共有、主体性の尊重

②学校体制の見直し

- ・目的達成のための仕組みづくりの重視
- ・教師だからできること、教師でなくてもできること、教師でない方が効果的であることの明確化
- ・目的連携、多職種連携の重視

③多様性の尊重

- ・『社会の土台づくり』としての学校に対する共通理解
- ・不要なルール撤廃、必要なルールの設定（対話をもとに）

- ・それぞれのペースの重視（内容や方法についても可能な限り尊重）
- ・心理的安全性の確保

④個に応じた指導・支援

- ・画一的カリキュラム、講義中心一斉授業、「枠付けされた学び」の見直し
- ・個別最適な学びを実現するための仕組みづくり
- ・「効率的でないこと（学びの廻り道）」の重要性に対する共通認識
- ・多様な教職員とのつながりの形成（固定的な学級担任制の見直し）
- ・必要な時に必要な相手とつながれる力の育成（関係づくりを含む）

⑤複数のラーニンググループの編制

- ・固定的な学級編成の見直し
- ・必要な時に必要な人とつながれる学びの共同体づくり
- ・複数のコミュニティへの所属と緩やかなつながりの尊重
- ・異年齢集団での活動の重視

【「探究の学び」に関わって】

①「探究の学び」に関する共通理解

- ・育む資質能力の明確化
- ・目的と方法についての理解
- ・先行実践等を学ぶ機会の確保
- ・課題解決のための相談体制や校内研修の充実

②子どもの好奇心・探究心の尊重

- ・「問い」が生まれるような実体験等の充実（「本物」との十分な触れ合い）
- ・子どもの見取り、思考の予測に対する教職員の力量形成
- ・再構成の可能性をもたせた単元計画
- ・個人探究、試行錯誤の時間の確保
- ・教師のコーディネータとしての役割の重視

③自律した学習者の育成

- ・教師が行う「与えること」の精査
- ・「学びの成果」に関する共通理解
- ・「自ら求める力」の育成の重視
- ・計画的な段階的支援（待つことを含む）の実施

④伴走者としての教職員の役割

- ・目標設定面談と自己調整面談の充実
- ・対話を通じたフィードバック、軌道修正、後押し、環境づくりなどの実施
- ・教科と関連した学びの計画
- ・協働探究者としての位置付けの認識

⑤地域社会との連携

- ・ビジョンの共有
- ・互恵関係の構築
- ・「本物の問題（地域資源等）」を扱うことの重視
- ・「当事者の生の声」の活用
- ・教育委員会、民間企業等との連携

以下に、幼稚園と義務教育学校からなる幼小中一貫の私立校で、「探究の学び」を軸としたカリキュラムを展開する「軽井沢風越学園」について、その特徴的な取組を3つ紹介する。

1つ目は、「学びの方法やペースの自己決定」についてである。一斉授業という形は基本的にとらず、参観した算数・数学の学びにおいては、教科書を活用する、タブレットで調べる、他の子どもに質問をする、教え合いながら同じ問題に取り組む、スタッフに自分の解法について説明するなど、その取組方法は子どもによって様々であった。これらを自分で決めており、スタッフは「目標設定補助」「進捗状況把握」「取組に対するフィードバック」等を行っていた。自律的に学ぶ子どもを育成するための特徴的な取組であると感じた。

2つ目は、「複数のラーニンググループの設定」についてである。これまでの固定的な学級編成を見直し、異年齢集団を基本とする学びのコミュニティを複数設けている。学ぶ内容や取り組む活動によって、それぞれの子どもが属するコミュニティが変わる。多様性の尊重や協働関係の構築、主体的な学びの実現のための特徴的な取組であると感じた。

3つ目は、「つくる経験の重視」についてである。「探究の学び」における「つくる経験」に加え、「かざこしミーティング」や「ホーム」の取組における「コミュニティのづくり手」となる経験を積んでいる。自分たちで、自分たちの生活をよりよくするための方法などを話し合い、その実現のために具体的な行動をするというものである。「社

会のづくり手」としての学びを得る、特徴的な取組であると感じた。

この視察を通して、今後の社会を見据えた「新しい学校の在り方」を学ぶことができたと考える。充実したスタッフや恵まれた施設・設備など、一般の公立校では簡単にまねできないところも多いのは確かであるが、学校づくりの発想や目指す子どもの姿、それを実現するための仕組み、スタッフが何を大切にしているかなどについては、参考になる点が多くあった。一方で、この学校のスタッフも日々悩みながら、迷いながら実践を行っているということも分かった。どこかに「完成された理想の姿」やそこに至る「正解の道筋」というものが見えているわけではなく、常にそれを探し求めながら取り組んでいるのだと感じた。

4 調査から得た学び

様々な調査を行ってきたが、その全体を「不登校児童生徒をサポートする新しい学校の在り方」という観点から捉えると、「ひとりひとりに応じた指導・支援をいかに行うか」ということが、共通するキーワードとして浮かび上がってくる。そしてこの実現のためには、「仕組みの改善・改革」が不可欠であることが分かってきた。調査活動からはそのヒントがたくさん得られたと考えるが、「明確な策」が見出されたわけではない。先進的な取組に触れる中で、そのような実践も、試行錯誤を繰り返しながら協働的に作り上げられているもの（つねに発展途上にあるもの）であるということも見えてきた。「新しい学校の在り方」は、「追究し続けるもの」なのだと学んだところである。

最後に、今回の訪問調査や聞き取り調査は、多くの方々のご協力によって実現されたものである。関係者の皆様に、改めて感謝を申し上げる。